



Title	ケニア教育探訪記
Author(s)	志水, 宏吉
Citation	教育文化学年報. 2023, 18, p. 13-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ケニア教育探訪記

志水 宏吉

1. はじめに

2023年2月28日～3月9日の期間、ケニアに行き、学校等を訪問してきた。30代にイギリスで暮らした時代に、北アフリカに位置するモロッコとエジプトにはごく短い期間滞在したことはあるが、いわゆる「サブサハラ」（サハラ以南のアフリカ）の国を訪問したのは、初めてのことであった。つまり今回の訪問は、私にとって「初めてのアフリカ」といういい体験であった。

きっかけは、人間科学研究科の同僚である澤村信英先生に誘われたことである。澤村先生は、「アフリカ・アジア諸国における教育の普遍化と格差に関する国際比較研究」といタイトルの科研費基盤研究（A）の研究代表者であり（澤村 2014）、私は日本担当として研究分担者の役割を与えられている。その私に、ケニアに行きませんかというオファーが来たのである。アフリカに？と一瞬たじろいだものの、これまで私は南アメリカや東・東南アジア、そしてヨーロッパのいくつかの国々には視察や調査に行ったことがある。オファーを受けてしばらくすると、アフリカにも行っておきたいという気持ちが頭をもたげてきた。そして、今回の調査が現実のものとなった。

メンバーは、澤村先生と私のほかに、ケニアの教育を専門とする帝京大の大場麻代先生（大場 2022）、人科の同僚であるフランス教育の専門家である園山大祐先生の4人。先発隊として大場先生が先にケニアに入り、澤村先生と私がドバイ経由でケニア・ナイロビに入った。他方、園山先生は、私自身の科研費で調査に赴いていたフランスからナイロビに合流した。4人がそろったのが、3月1日のことである。ナイロビの住宅街にあるホテルで、私たちは1週間の「合宿生活」を行った。澤村先生が運搬した、5キロのコメを中心とする日本の食材をベースにした自炊中心のホテル暮らし。それは、大変心地よく、そして愉快的なものであった。



写真1 ホテルの蚊帳付きベッド

以下本稿では、次の 2 節において今回のケニア調査の概要を述べる。そして続く 3 節において、今回の調査において私が感じたこと、考えたことを、メモ書き風に記しておきたい。本稿の中身は、論文的なものではなく、エッセーや忘備録的な性格を強く持つものであることを、あらかじめお断りしておきたい。

2. 調査の概要

1) 目的

ケニアは東アフリカに位置する、日本の面積の約 1.5 倍、人口は約 5500 万人の国である。イギリスから独立したのが 1963 年のこと。首都は、標高 1800 メートルの高地にあるナイロビ。私たちの滞在中の昼間の気温はだいたい 28 度ほどあったが、日差しは強いものの湿度は低くカラッとしており、たいへん過ごしやすく感じられた。

私が専門とする教育社会学の古典の一つに、英国の R.ドーア氏が書いた『学歴社会—新しい文明病』(R.P.Dore 訳書, 2008) がある。イギリスと日本の社会を比較し、学歴社会化がより激烈である日本の状況を、遅れた近代化の影響であるとする「後発効果」(the late development) 仮説を提出したことで知られる著作である。若い頃の記憶では、その本のなかにはイギリスの植民地であったケニアの事例も扱われていた。日本よりもさらに「後発国」であるケニアでは、さらにいっそう学歴社会化が激化するというストーリーだったと思う。

今回の調査の目的は、7 年前にスタートしたケニアの大規模な教育改革の現状と課題を把握することにあった。その教育改革の中心が、①学制改革と②カリキュラム改革である。

まず、前者の学制改革について。従来の 8・4 制を 6・3・3 制に改めようとする改革が現在進められており、1 月からスタートしている今年度がその 7 年目にあたるという。従来の制度では小学校 7 年生になるところであるが、新制度のもとで今年から「ジュニアセカンダリースクール」(JSS) が創設され、その学年の子どもたちは「JSS1 年生」と呼ばれる存在となっている。今回いくつかの小学校を訪問したが、そこでは新制度の 1~6 年生、JSS1 年生、そして旧制度の 8 年生という 8 つの学年が存在するという形となっていた。大変ややこしい。理解できるであろうか。いずれにしても、新制度が定着するにはあと 2 年間が必要である。すなわち、今年の JSS1 年生が 2 年後に JSS3 年生(最上級生)となり、制度移行が完結するのである。

なぜ 8・4 制を 6・3・3 制に改めたのか。聞き取りを進めたが、理解できたのは、第二次世界大戦後に生じた日本の学制改革と同様な事情がケニアにもあったらしいということである。すなわち、8・4 制のもとでは、ごく限られた者だけが中等教育に進むことができていた。その形を改善するために、言葉を換えると、中等教育機会をすべての人に解放するために 6・3・3 制が考案されたというのである。

続いて、後者のカリキュラム改革について。こちらはケニアでは、CBC という略語で呼ばれていた。Competence-based curriculum のことである。この CBC の方は、今日では世

界標準となっているということができよう。日本でも、現行の学習指導要領は、完全に同様な考え方に即したリニューアルされたものだとは位置づけることができる。「知識を伝える」教育から、「能力を育成する」教育へ。ケニアでも、その改革が推進され始めて 7 年が経過したことになる。

表 1 ケニアの新カリキュラム

小学校低学年 1, 2, 3 年	小学校高学年 4, 5, 6 年	中学校 7, 8, 9 年
〈必修科目〉 1.言語または点字 2.スワヒリ語またはケニア手話 3.英語 4.数学 5.環境 6.衛生・栄養 7.宗教教育 8.ムーブメント・図画工作 *すべての領域において ICT を使う	〈必修科目〉 1.スワヒリ語またはケニア手話（週 4 時間） 2.英語（週 4 時間） 3.数学（週 5 時間） 4.家庭科学（週 3 時間） 5.農業（週 3 時間） 6.宗教教育（キリスト教/イスラム教/ヒンズー教）（週 3 時間） 7.図画工作（週 3 時間） 8.保健体育（週 5 時間） 9.科学技術（週 4 時間） 10.社会（週 3 時間） 〈選択科目〉（週 2 時間） - 外国語（アラビア語、フランス語、ドイツ語、中国語） - 民族語 - ケニア手話 - 点字 *すべての領域において ICT を使う *週に 1 度、パストラルプログラム（宗教関係者による授業）を行うこと	〈必修主要科目〉 1.英語（週 5 時間） 2.スワヒリ語またはケニア手話（週 4 時間） 3.数学（週 5 時間） 4.理科総合（週 4 時間） 5.保健教育（週 2 時間） 6.技術準備・キャリア準備教育（週 4 時間） 7.社会（週 3 時間） 8.宗教教育（1 つ選択：キリスト教/イスラム教/ヒンズー教）（週 3 時間） 9.ビジネス教育（週 3 時間） 10.農業（週 3 時間） 11.ライフスキル（週 1 時間） 12.スポーツ・体育（週 2 時間） 〈選択必修科目：最低 1 科目、最大 2 科目〉（各週 3 時間） - 美術(Visual Arts) - 舞台芸術(Performing Arts) - 家庭科学 - コンピューターサイエンス - 外国語（アラビア語、フランス語、ドイツ語、中国語） - ケニア手話 - 民族語 *すべての領域において ICT を使う

表 2 ケニアのある小学校における 4 年生の時間割

	8.20- 8.55	8.55- 9.30	9.30- 9.50	9.50- 10.25	10.25- 11.00	11.00- 11.30	11.30- 12.05	12.05- 12.40	12.40- 14.00	14.00- 14.35	14.35- 15.10
月	数学	保健体育	休憩	英語	科学技術	休憩	スワヒリ語	宗教教育	昼休み	社会	家庭科学
火	英語	数学		社会	保健体育		家庭科学	家庭科学		図画工作	宗教教育
水	英語	保健体育		数学	農業		民族語	社会		スワヒリ語	図画工作
木	数学	英語		科学技術	保健体育		スワヒリ語	図画工作		農業	農業
金	パストラル*	数学		スワヒリ語	保健体育		科学技術	科学技術		民族語	宗教教育

*「パストラル」はケニア国内で正式に登録されている宗教団体や組織の関係者による授業を指す。「宗教教育」とは別で、宗教教育は教員による授業を指す。

2) 日程

ナイロビで私たちがチームとして実質的に動けたのは 6 日間であった(3 月 2 日～7 日)。澤村先生が長年にわたって培ってこられた人間関係・ネットワークをベースにして訪問先が定められた。各種の交渉に主としてあたったのが、かつて青年海外協力隊員としてケニアの高校で教鞭をとった経験のある大場先生であった。具体的には、6 日の間に、5 つの学校、

1つの大学、ナイロビ市教育委員会、澤村先生の知り合いのお宅2軒を訪問することができた。その一覧が、表1である。

3月2日および3日には、トータルで5つの学校を訪問することができた。公私の内訳が、公立校が3つ、私立校が2つ。3日の午前には訪問した Daima 小学校には、約2600名の子どもたちが通っている。高学年になればなるほど、子どもたちの数は増えていく。例えば、6年生には372名の子どもが在籍しているが、学級数は4つであるため、一クラスの子どもの数は単純計算すると93名ということになる。写真2を見ていただければ、子どもたちが教室に「鈴なり」になっている様子が知れよう。

他方で、2日の午後に訪問した、キベラスラム内にある低学費の私立小学校では、子どもの数はずっと少なかった。写真3で見てとれるように、教室は日本の感覚からすると、きわめて粗末なもので「掘っ立て小屋」と形容できるような実態の教室であった。



写真2 Daima 小の高学年の教室



写真3 私立小の教室風景

3月4日（土）は、ナイロビ郊外にある、澤村先生の古くからの知り合いである校長先生のお宅を訪問し、昼食をごちそうになりながら、くつろいだ時間を持つことができた。また続く5日（日）には、ナイロビ市内をぐるっと散策した。

6日（月）には、ケニアで2番目に高い威信を有するケニアッタ大学を訪問し、大場先生の知り合いの教員からケニアッタ大学自身や教員養成システムについて興味深い話を聞くことができた。ケニアッタ大は、ケニア国内および周辺諸国における教員養成の要と目されている大学である。午後には、その教員の子どもさんたちが通っている私立小学校を訪問することができた。

最後の7日（火）には、ナイロビ市の教育システムを統括している教育委員会を訪問し、その現状と課題についてつつこんだ話をすることができた。

表 3 日程と訪問概要⁽¹⁾

2023 年 3 月 2 日 (木) 午前 Kibera Primary School 訪問

- ✧ 学校の概要（児童数、教員数）や新カリキュラム導入に伴う教科書の配布状況、政府による教員の配属、給食事情等についてお話を聞いた。
- ✧ 授業は 3 年生の算数を参観。ストローを使った引き算の学習。

2023 年 3 月 2 日 (木) 午後 Visionary/St. Christine Primary School 訪問

- ✧ 1 クラス 10 名程度の小規模校。別棟で先生方がタブレットの使い方についての研修。
- ✧ 新カリ導入に伴う学校の対応や、私立校における学費の支払い状況、学校運営等。

2023 年 3 月 2 日 (木) 午後 Global One 訪問

- ✧ 校舎は（海外の援助を受け）建設中。上級生と下級生が異なる校舎で授業を受けていた。

2023 年 3 月 3 日 (金) 午前 Daima Primary School 訪問

- ✧ 学校の概要（児童数、教員数）や新カリキュラム導入に伴う教科書の配布状況、政府による教員の配属、給食等について。その後校舎（教室、トイレ、給食調理室等）を見学。
- ✧ 授業は 2 年生の環境を参観。水について、水はどこにあるか、いかに運ばれるか等。

2023 年 3 月 3 日 (金) 午後 Marura Primary School 訪問

- ✧ 学校の概要（児童数）や新カリキュラム導入に伴う教科書の配布状況、教員の配置等。
- ✧ 2 つの授業を参観。4 年生の算数で、2 桁引く 2 桁の引き算をグループ毎にお手製のそろばんを使って。今一つは 5 年生の英語、友達に手紙を書く書き方（書式）について。

2023 年 3 月 4 日 (土) カジアド・カウンティの校長先生 (Mr. Miano) 宅訪問

- ✧ 校長先生の奥様の学校について、新カリキュラム導入に伴う課題などのお話を伺った。
- ✧ 校長先生がご帰宅されたので、新カリキュラム導入に伴う課題や校長先生の見解などについてお話を伺った。

2023 年 3 月 6 日 (月) 午前 Kenyatta University (KU) 訪問

- ✧ 大学院を訪問し、Prof. Elishiba N. Kimani 院長に、教科書調達について話を聞く。
- ✧ Dr. Francis Likoye Malenya 氏に KU 全般、新カリキュラム導入の背景等について聞く。
- ✧ 教育学部棟で、Executive Dean: Prof. Samson Rosana Ondigi 氏 と Deputy Executive Dean: Dr. Nelly Were Otube 氏に教育学部および新カリキュラムについて聞く。

2023 年 3 月 6 日 (月) 午後 PCEA Wendani Academy (私立小学校) 訪問

- ✧ 7 年生と 8 年生の教室、制服や机など新カリと旧カリのクラスにおける違いを見学。

2023 年 3 月 7 日 (火) 午前 リフレクション

2023 年 3 月 7 日 (火) 午後 ナイロビ・カウンティ教育局訪問

- ✧ Nairobi Regional Deputy Director of Education: Dr. Gladys Malonza 氏から新カリキュラムについての現状を聞く。
- ✧ その後、Nairobi County Director of Adult Education: Ms. Salome Terah 氏のオフィスで成人教育と新カリキュラムの課題について話を聞く。

3. 所見

わずか一週間の滞在であったが、それは大きな刺激に満ちたものであった。今回の調査のなかで特に印象に残ったことを、4点にしばって整理しておきたい。

1) 子どもについて

最も強く印象に残ったことがらが、子どもの学業に対するモチベーションが高いように思えたことであった。一クラスに 80～90 名居ようかという「寿司詰め」状態のなかで、子どもたちの顔は一樣に輝いていた⁽²⁾。真っ黒な顔に大きな白い眼だから余計に目立つのであろうが、とにかく子どもたちの目の輝きが何よりも印象的であった。

朝ごはんを食べていない子が多く、学校によるとランチも抜きであるという子どもたちも存在していた。一日 30 円ほどの給食費が払えないからである。要するに、かなりの子どもたちが、お腹が減っている状態で授業を受けているはずであった。にもかかわらず、机に伏せっている子やそっぽを向いているような子は、一人もいなかったと言ってよい。このモチベーションの高さは何なのだろう。それが私の最初の疑問であった。

チーム内での振り返りの時間に私はその疑問を、アフリカ・ケニアが専門の先生たちにぶつけてみた。その答えは、概略以下のようなものであった。すなわち、学校はサンクチュアリーのようなものなのではないかと。多くの子どもたちの家庭生活は、きわめて厳しいものである。それがゆえに、学校に来ることがかけがえのないものに映るというのである。学校には多くの友だちがいる。そして先生たちが毎日新しいことを教えてくれる。彼らはそれをエンjoyしている。楽しくて仕方がないのだと。

私はまだ生まれていなかったが、第二次大戦直後の日本は、ことによるとそれと類似したものだったのかもしれない。飢えていた子どもたち、学びに対するハングリーさの源は生活の厳しさにあったに違いない。ラフな第一印象にすぎないが、ケニアの子どもたちを見ると、自分の親や祖父母のころはきつこうだったのだろうと思えた。そして今、日本の子どもたちの状況はそれとは大きく異なっている。不登校、いじめ、学級崩壊などなど。学校というものの存在感が、ケニアと日本ではきわめて異質なものになっていると感じられた。

ケニアをふくむアフリカ諸国の人口は急増中である。子ども・若者の多さとその活力が、「アフリカの時代」を切り拓いていくのではないか。そうした思いにとらわれることが、今回の訪問中しばしばあった。

2) 教育改革について

制度改革とカリキュラム改革、本来は別のものである 2 つの要素が、今日のケニアでは渾然一体となって追求されているという感が強かった。学校制度の枠組みが抜本的に改められようとしている一方で、そのコンテンツも急激に変革されようとしている。「本当にそんなことができるのか」というのが、それを知った時の私の率直な感想であった。もっと強

く表現するなら、「そんなことできるわけない」と感じた次第である。しかし実際に見たものは、そうした事態が引き起こしつつある混乱や軋轢であった。

もっとも、戦後直後の日本の実態も、それと同種のものだったはずである。すなわち、1947年からスタートした6・3・3制と民主主義的教育の同時的遂行は、現代のケニアで生じていることを同じと言えば同じものであった。

それにしても、今日のケニアの学校の状況はしんどいものであった。ナイロビ市教委の担当者は、「端的に言って、以下の4つのものが課題である。すなわち、第一にインフラ。第二に教科書、第三の教員、そして第四に人々の意識だ」とわかりやすく総括してくれた。まず、校舎・教室や施設設備が不足している。次に、教科書がちゃんと整っておらず、また各教科を教えるべき教員が絶対的に足りない。そして最後に、改革を受け止める人々の意識や態度が変わらなければならない。アウトサイダーの目から見ても、課題山積であることは否めない。

例えば、コンピュータサイエンスという教科がJSSで設定されたのに、生徒たちが使えるコンピューターがそもそも校内に一台もない、という話をある小学校で聞かされた。また算数の授業では、重要な教具として、いまだに手づくりのそろばんが用いられていた(写真4)。



写真4 手づくりのそろばん

そもそもJSSを既存の小学校のなかに設置するという方針が正式に示されたのが、去年の6月(新制度が始まる半年前)だったということである。日本の常識ではありえないのんびりさ加減である。1月に新学年がスタートしているのであるが、たくさんの教科書が未到着であるという現状が小学校には見られた。「大混乱のようにも思えますが、5~10年経ったら何とか形になっているというのがケニアです」という澤村先生の言葉。それも一つの物事の進み方なのかもしれない。

3) 言語について

最も衝撃的だったことの一つは、小学校の低学年から英語の授業が行われていることであつた。英語の授業が、ではない。すべての授業が、英語で行われていたのである。これは、まさに青天の霹靂とでもいうべき出来事であつた。無知をさらけ出すことになるかもしれないが、私はてっきり小学校の授業は、現地の共通語である（＝諸部族の言語ではない）スワヒリ語で行われているものだと思い込んでいた。英語が授業言語になるとしても、それは中学校以上からだろうと決めてかかっていたのである。

現実とはそうではなかった。1年生の子どもたちが、英語で各教科の授業を受けていたのである。当然彼らは、コンテキストにもよる部分もあるが、英語でふつうにコミュニケーションがとれるようになる。ナイロビ等の都市部では、もはや子どもたちは部族（キクユ族とか、マサイ族とか、ルオ族とか）の言語を使わないことが多いようであるが、地方では依然として部族の言葉は健在である。そうすると、子どもたちには「部族の言葉」「スワヒリ語」「英語」という3つの言葉の層が存在することになり、彼らは頻繁にスイッチングを行いつつ言語コミュニケーションをとるということになる。

言語は人間存在の基礎であり、アイデンティティの基盤となるべきものである。そのベースが英語であつてよいものだろうか。複雑な思いを禁じえなかった。

4) アフリカの精神について

1) に関連して、なぜ子どもたちはこんなに明るいのだろうとも思った。子どもたちだけではない。大人たちも概して明るいのである。屈託がないというか、ポジティブであるというか。日本人ならびつくりするような境遇にある人たちも多かろうが、とにかく明るいのである。

そう思っていた時、ケニアの教育が専門である大場先生は、私にある英語のフレーズを教えてくれた。I am because you are。訳すと、「あなたがいるからこそ私がある」ということだ。この言葉は、ケニアだけでなく、アフリカ全体の人間性や社会像を表す表現として広く用いられているとのこと。「他者があつてこそ自分だ」という見方と云えがいいだろうか。意味を付け加え言うなら、「困った時には助け合うのが当たり前」という文化があるということである。勉強がわからなければ聞くのが当たり前、恥ずかしいことでも何でもないというセンス。いわゆる相互扶助の精神ということになるだろうか。それがアフリカ社会の第一の特徴だということである。

西洋の個人主義、あるいは日本の集団主義とは明らかに異なる精神・価値観がそこにあると考えてよいだろう。他者を蹴落とすとか、横並びで目立たないようにするといった行動様式は、アフリカの人たちにはどうもなじみにくいようだ。それが本当であるならば、大変にうらやましいことである。

所見と銘打ったものの、最後は雑感となってしまった。

遠い国であったアフリカ・ケニアは、現時点の私には、身近に感じられる国となっている。見かけ上ははるかに隔たっているかに見えるその社会は、案外日本の社会と親近性を有しているかもしれない。

そのようなことを感じる 2023 年の春である。

〈注〉

- (1) 本稿の表 1・2 の作成にあたっては、大場麻代先生の全面的な協力を得た。ここに記し、感謝の意を述べたい。
- (2) 在籍児童の数について。現地で得た情報によると、Daimo 小学校の在籍者数は、2595 名にのぼる。1 年生 170 名、2 年生 221 名、3 年生 249 名、4 年生 305 名、5 年生 367 名、6 年生 372、新カリキュラム下の 7 年生 517 名、旧カリキュラム下の 3 年生が 394 名である。本文でもふれたが、6 年生のクラス数は 4 であるから、単純計算すると一学級に 90 名以上が在籍していることになる。

〈引用文献〉

- R.P. Dore, 1977, *The Diploma Disease :Education, Qualification And Development*, Institute of Education. (=2008, 松居弘道訳『学歴社会－新しい文明病』岩波書店)。
- 大場麻代, 2022, 「グローバル・サウスからみたインクルーシブ教育の課題」, 『アフリカ教育研究』第 13 巻, pp.12－21.
- 澤村信英, 2014, 『アフリカの生活世界と学校教育』明石書店。